レッスン：SPA NO.25

テーマ：アークエンジェル/質問

SPA 25.DOC/9701/K7

私の姉妹・兄弟たち、

スピリット、光、火の子供達よ。私たちは常に主、絶対、主の聖性に包まれています。

　私たちはこれまで繰り返し現在のパーソナリティーとしての人間について話してきました…現在のパーソナリティーは生それ自体の現れではなくて現象の現れです。また生それ自体の現れとしての人間についても述べてきました。存在の諸世界における人間は生の特質を完全に現していますが、実存の諸世界における人間は生の特質を表現していません。なぜなら、意識が無知のなかに囚われているからであり、それは生の現象です。そうです、将来、生の現象について多くを話すことになるでしょう。

私たちは意識をいくつかの現れに分類しました。いわゆる本能的意識のセルフ・エピグノシス、潜在意識のセルフ・エピグノシス、超意識のセルフ・エピグノシス。次のステップは生の現れ、生の意識、そして生それ自体の意識には分類、区別というものはありません。

以前のレッスンにおいて、無知にいる間、人間は五感を使用して自分自身を表現し、下向きの五芒星であり、現れとしてこれらの五感を使用している時、その人間は生きている人間ではなく死者と共にいる、と述べました。ですから、人間が無知のなかにいる限り、その人は地面の中にいて、以前のレッスンで述べたようにその人は四面ピラミッドの底部から離れた地中にいます。

さて、モニュメントとしての四面ピラミッドは何かの役に立つのでしょうか？私たちはこの四面ピラミッドを過去で使用されたように、使用するのでしょうか？これらのモニュメントはファラオによって墓として使われたのを見ています。さらに地球上の他の多くの場所においても。私たちが四面ピラミッドを過去に使われたごとくに使用することはありません。私たちはそれを創造界の様々な不変の法則を象徴するシンボルとして使います。現れの様々なレベルをマスターするために、四面ピラミッドのなかでワークを行います。なぜなら、創造界の様々な法則をマスターするということは、同時にサイコノエティカルな成長を意味するからです。

四面ピラミッドは四つのエレメントをマスターすることを意味し、現在のパーソナリティーをマスターすることを意味します。しかし、初めは四面ピラミッドからスタートすることはしません。現在のパーソナリティーの墓のなかでやるべきことが沢山あります。それは前に何度も話したように、地面のなかで私たちはそれを現在のパーソナリティーの部屋、生の現象の部屋と見なします。

私たちはこの部屋のなかで常に現在のパーソナリティーに付き添っている四つのアークエンジェルに同調するためのワークを行います。実際には五つのアークエンジェルがいますが、初めは四つのアークエンジェルを扱います。私たちはミカエル、ガブリエル、ラファエル、ウリエルという四つのアークエンジェルと同調することを試み、それらを通じて後には各アークエンジェルが代表しているそれぞれのアークエンジェルのオーダー（＊グループ）と同調することを試みます。

ミカエルは火を司っているアークエンジェルのオーダーを代表しており、ガブリエルは水のエレメントを司っているアークエンジェルのオーダーを代表し、ラファエルはエーテルを司るオーダーを代表し、ウリエルはコーディネーターの役割を演ずるオーダーを代表しています。他の三つのオーダーの仕事をコーディネートします。さらにまたウリエルを通じて、私たちは自分の欠点から邪魔されることなく、離れたところから自分の真の現れを見ることを試みるのです。というのも、ウリエルを見ることのできるサイドはまた私たちの現在のパーソナリティーの鏡でもあるからです。

Page2

過去に述べたように、私たちは自分の動機と意図を分析する必要があります…真理の探究へと自分を駆り立てるのは何か、何を発見しようとしているのか、探求によって何を求めているのか。私たちはパワーと能力を求めているのか、それともより良い現れを求めているのか、誰のためにそれを求めているのか？パーソナリティーはそれら全てを問う必要があります。なぜなら、もし探求をする目的がパワーと能力を現すことなら、あなた方は失望することになるからです。この探求に従う唯一の目的はより良いセルフ、さらにそれより良いセルフを現すことによって同胞の人間たちを助けることだからです。それによって真剣な真理の探究者は同胞の全ての人間たちを平等に抱くことができるのです。

さて、現在のパーソナリティーが四面ピラミッドの下にある部屋を出ることができるようになる前に、**無知ゆえに人間が創ってきたあらゆるエレメンタルに直面できるようになるために、一生懸命にワークをする必要があります。それらすべてのエレメンタルは地中のなか、地面のなかにあります。ですから、それらのエレメンタルに直面できるようあらゆる必要な手段を獲得するために真剣にワークをする必要があります；それらのエレメンタルとは言い換えれば悪魔です。なぜなら、人間が無知にある間に創り出すものは全て悪魔的想念、悪魔と見なすことができるからです。**

そうです、この部屋のなかで私たちは他のシンボルを使いますが、それはあなた方が創造するものです。確かにそれは後に四面ピラミッドのなかで用いるものと全く同じシンボルです。しかし、その部屋に適合するべくサイズが異なります。そしてその部屋で用いるそれら全てのシンボルとワークはあなたの気づきのレベルを上昇させるために必要な手段をあなた方に提供します。つまり、前に述べたように意識的意識のセルフ・エピグノシスの現れというレベルです。そのレベルに到達したとき初めてあなた方は地中のエレメンタルに直面する用意ができ、四面ピラミッドのなかに立つことができるのです。

いいですか、探究者にとってもっとも真剣なワークは四面ピラミッドのなかでスタートします。経験に基づく知識は四面ピラミッドのなかでのみスタートします。その人が意識的意識のセルフ・エピグノシスを現すようになった時です。

ですから、もしあなた方が実体的体験を望んでいるなら忍耐が必要です。それ以前における体験はそれがいかに実体的と見えようとも、それは幻想です。あるいは潜在意識によるものです。ですから、この部屋、墓から出るためには一生懸命にワークをする必要があります。最愛のお方は言いました、「彼ら自身の死を埋めるために死者から離れよ」と。**最愛のお方から見れば、無知にある人間は死んでいるのです。**四面ピラミッドのなかに立つ時、あなた方は再び主の道に向かおうとするのです。実際、現在のパーソナリティーをマスターするためにそれ以外の方法はありません。

現在のパーソナリティーをマスターする時、それはもはや意味を必要としない、ということです；もはや無知に取り込まれておらず、現在のパーソナリティーの素質的可能性のサイクルによって提供されたそれらの可能性、能力を完全に現すのです。しかし、転生のサイクルを後にすることはしません。他の全ての人類を助け、手を差し伸べるために転生のサイクルに留まるのです。

過去にこれに関してたくさん話しましたが、現在のパーソナリティーについてはまだ話すことが沢山あります。

繰り返しますが、私たちの目的、私たちの仕事は私たちの本来の質、つまり生の特質をもっと、もっと現すことです。しかし、大いに注意する必要があります。というのも私たちは不動の法則を扱う必要があるからです。もしそれらの法則に反するなら、その結果に苦しまねばならないのです。真理の探究者として私たちはそれらの法則に逆らうことはしません。私たちは常に何であれ最愛のお方が示してくれたことに従います。探求している間に、主が示してくれたことにマッチしないものがあれば、それは何か間違っているのです。私たちはそれにはタッチしません。

Page 3

ですから、あなた方はエレブナから与えられるものに関して恐れる必要はありません。それについては保証します。私たちは魔術の使用には反対します。パワー、能力を現すためのいかなるテクニカルな手段をも認めません。パワーと能力は唯一、サイコノエティカルな成長、気づきの成長の結果として得られるべきものです。言い換えれば、生の特質の現れです。テクニカルな方法では、生(Life)から表現することのできるパワーと能力以上のものを現すことはできません。勿論、それは当然のことです。さもないと、反対のものが存在の諸世界に入れることになりますから。しかし、無知は生の現象にのみ留まります。

質問：地面のなかのエレメンタルは悪魔的想念であると言いますが、つまり否定的想念ということですが、そこには肯定的想念はないのですか？

Ｋ：地中のなかに？ありません。**私たちがエレメンタルという時、それは人間が創り出すものです。しかし別のエレメンタルもあり、それらはアークエンジェル、エンジェルが創造するものですが、人間が無知のなかにある間は人間はそれらに同調することはまったく不可能です。無知のなかにある人間が同調できるものは悪魔的なエレメンタルだけです。わかりますか？勿論、地中にも生はあります。なぜなら、生がなければ地面も存在しないからです。しかし、人間はそれらに同調することができません。**

質問：それでは**全てのエレメンタルは無知のなかにいる人間が創造したもの**なのですか？

Ｋ：そうです。それらは否定的エレメンタルであり、サミュエルとも呼ばれるルシファーのエレメンタルが地面を受け持っています。しかし、ルシファーとサミュエルは悪魔と見なされるようなものは何も現していません。ルシファーは原因・結果の法則を受け持っているのです。原因・結果の法則、それは無知の人間を助けるだけであり、それ以外の何ものでもありません。**悪魔として存在するものは実際には人間による悪魔的想念、思考にすぎません。悪魔というものはありません。神の黙想による創造にはそのようなものはありません。**

質問：人間の無知によって現わされた否定的エレメンタルだけがあると言いましたが、無知なる人間または人間の無知について定義していただけますか？なぜなら、私は肯定的エレメンタルがあり、同胞の人間たちに愛あるいは善意のエレメンタルを現すことができると教えられたからです。それらは肯定的エレメンタルであり、良い影響をもたらします。人間の無知について定義してください。

Ｋ：**人間が意識的意識のセルフ・エピグノシスを表現するようになるまでは、人間は無知の限界のなかにいて、地面にフォーカスしています。**

**その人が愛であると理解しているような愛を現そうとするとき、その愛は人間によって表現されるべき真の愛でしょうか？**

**私たちが現そうとする愛、アガピは生の真の現れです。なぜなら生とは愛だからです。生とアガピを分けることはできません。**

**愛は一つです。最愛のお方は言いました、「私たちは自己を愛する如くに同胞の人間たちを愛するべきである」と。**

**その場合の自己とは鏡のなかに見る自己、私たちが魅せられている自己でしょうか？私たちは自己のイメージを見、それに魅せられていますが、同胞の人間たちに現すべき愛とはそのような愛でしょうか？**

**違います。最愛のお方が意味した愛とは、私たちが現在のパーソナリティーをマスターした時に表現される愛です。その時、現在のパーソナリティーは生の特質の完全な表現となり、それは愛そのものです。その時、愛の表現は同胞の人間全てを抱きしめることができ、彼らを助けることができるのです。**

**ですから、人間が表現のために五感を使用している間は人間は無知のなかに、死者の間にいます。**

その時、五感のシンボルは上向きではなく下向きになっています。というのも、私たちは物質に魅惑されており、物質にフォーカしており、物質に依存しています。少なくとも私たちはそう考えています。無知にある間は、上向きだと思ってもそれは下向きなのです。私たちは五芒星をその適切な位置、つまり上向きにする必要があります。

Page 4

しかし、そうするためには五つの超感覚を使用して自分自身を現すようになる必要があります。ですから下向きの五芒星は“悪魔的”なシンボルなのです。それは無知な人間を象徴しています。なぜなら、無知のなかにいる人間は悪魔的想念を創造し、それらは悪魔、エレメンタルだからです。いいですか、そういったエレメンタルは人間がそれにフォーカスするとたくさんの痛みを創造します。また人間がそれらに引き続きフォーカスすると、たくさんの現象をもたらします。なぜなら、人間が表現し、創造するもの、そこにはたくさんのパワーがあるからです。

質問：悪魔的想念とはどういうものですか？例をあげてくれますか？

Ｋ：**悪魔、それは痛みを創造することのできるエレメンタルです。それは創造の法則に気づいておらず、自分の本質についてほとんど知らない人間が創造するものです。**あなたが生の現象としての現在のパーソナリティーを見るとき、そのパーソナリティーはバランスの諸世界にいて、そのバランスとは無知の結果以外の何ものでもありません。創造界の中には、言い換えれば様々な世界のある創造の諸世界として絶対存在が何を創造しようとも、そこには調和があり、バランスは全くありません。

**私たちは無知の結果として調和をバランスに変えてしまったのです。私たちは様々な意味、対立する二極の意味を創ったのです。それら全ては生の現象としての人間が創造したものです。私たちが最初の下降として存在の諸世界にいたとき、実存の諸世界においてさえそこでは生の特質が完全に現れていたのです。それらの諸世界はパラダイスであり、性の区別もなく、私たちが物質世界に入ったとき、そうです、その時初めて私たちは無知のなかに取り込まれたのです。勿論、それら全ては聖なる計画の一部であり、全てには目的があります。この目的については過去に説明しましたが、それは絶対存在の多様性のなかにあるモナドが自己実現したモナドとなり、自己実現を現すことであり、それ以外の何ものでもありません。勿論、自己実現は本質(Nature)としてあるのですが、それはそれ自身を表現していない状態としてあります。それは神の黙想の結果として生じていることです。なぜなら私たちは神の黙想のなかにあり、私たちは常に神のなかにあり、私たちは絶対存在を去ることは決してありません。唯一の違いは、私たちは神の聖なる黙想の活動のなかに入ったということです。そうです、神の聖なる黙想の活動のなかに入らない他のモナドセルフ、スピリットが無数にいます。数えきれないほどいます。**

質問：もし人間が無知の世界に入ったのなら、その計画とは何ですか？つまり、もし人間が無知であるなら、それは何のためですか？それを認識するため、あるいは無知から脱出するためですか？

Ｋ：そうです、現在のパーソナリティーとしてそれは思考・行動の仕方としての現れに過ぎません。しかし、その現在のパーソナリティーを生かしめているのは生それ自体です。それは全ての人間のなかにある生のスパークです。そして私たちがこのスパークの特質を表現しているか否かは問題ではありません。現在のところ、それを表現していません。しかし、私たちをその源へと引っ張るものが常にあります。そしてその源とは生それ自体に他ならないのです。

人間には絶えざる進化、成長があります。もし過去の人間を調べてみると、一般的に過去の人間の気づきの意識は現在の人間のそれよりもかなり低いことがわかるでしょう。将来は現在よりも高くなることでしょう。それゆえに私たちは決して過去を見ないように忠告しているのです。人間にとって重要なのは今です。今私たちがすること、今私たちが現していることです。未来のために現在を決して犠牲にすべきではありません。なぜなら、その時には未来もまた犠牲になるからです。過去を見て何が過去から現在にもたらされたかを見るべきである、と考えて人を助けようとする人々がいますが、そのような人々はそうすることによって、その人の現在のパーソナリティーの邪魔をしているのです。それは間違っています。人を助けようとするなら、今に働きかける必要があります。全ての過去が何であれ、その人にとって現在が最高なのです。ですから決して過去を振り返るべきではありません。常に現在に働きかけるべきであり、現在を大事にし、次の瞬間はさらに良くなるようにとするべきです。ここで私たちがやろうとしていることは進化、成長のプロセスを加速させることであり、それだけです。加速させることです。

Page 5

質問：つまり、たとえ今が最悪であっても、過去よりは良いということですね…。

Ｋ：勿論です。最高の過去は現在よりも悪いということがあります。なぜなら、善悪の意味は前に進むに連れて常に変化しているからです。今日、明日において許されることもより高い現れのレベルから見るともはや決して許されないということになります。

質問：それでは、今していることが最高か最悪かをどのようにして判断することができるのですか？倫理の基盤をどこに置くのでしょうか？二千年以来、全ての哲学者たちは何が善で何が悪か、その他のルールを求めてきました。倫理的規範です。人々が何をするべきか、何をするべきではないかを人々に知らしめようとしてきました。悪い人間にならないためです。しかし誰も教えることはできないのですね。なぜなら、善悪の全ての意味は変化し、各人の善悪の意味も変化するのですから。

Ｋ：私たちにとって許されることとは、人間の進化・成長を助けるようなことです。そして勿論、助けることができるのは各個人の気づきのレベルによります。あなたは他の人を助けることはできません。わかりますか？それゆえにエレブナにおいてさえ、私たちはあらゆる人を助けることはできません。なぜなら、与えたものを全ての人が理解するわけではないからです。それはあらゆる人がアプローチできるというものではありません。それゆえに時の流れのなかで異なったシステムが浮上してきます。ガイドライン？ガイドラインなしでは、あなたは自分自身を助けることはできません。それ故にあなたにはアシスタンス（＊助け）が必要なのです。私たちは決してアシスタンスを拒否すべきではありません。アシスタンスを拒絶するということは非常にエゴイスティックなことです。私たちは誰をも必要としており、お互いを必要としており、決して助けを拒否すべきではありません。また決して他人への助けを拒否すべきでもありません。アシスタンス、そうです、もしあなたが正しい道を進みたいと思うなら、アシスタンスは必要です。何故？なぜなら、もしあなたが山に登る時、そしてあなたが山に登る初めての人ならより良い道を探すでしょう。なぜなら多くの困難がそこにはあるからです。

そうです、あなたよりも高いレベルに既に登っている人がいます。そのレベルから見れば、過去にその人達が登った体験からすれば、その山に登るのは簡単なことではありませんでした。そうです、彼らは山から降りてきて他の人々が山に登るのを助けます。もし彼らが自分たちが登った同じ道を人々に教えるなら、そこに登るのは同じように困難です。彼らが行おうとしているのは、もっと簡単な道を探すことです。自分たちのためではなく（彼らにとってはもはや道を探す必要はありません）他の人々のためです。もっと速く登れる道、彼らが体験したような危険に遭遇することなく楽に登れる道です。そのようなことは毎日の生活のなかで起きています。

現代人は何かを達成するのに、過去の人間がしたと同じような努力をする必要はありません。現在では様々な手段があり、そのような手段は誰かが私たちに提供したものです。多くの科学者たちが研究し、それらを発明しました。それと同じ事です。私たちは探求であると言うとき、私たちは探求なのです。自分たちの探求をした人々がいますが（何かを達成するための努力です）、彼らは今では他の人々のために探求しています。現在の探求者が過去と同じような困難を経験しなくてもすむようにです。彼らは何かを達成するために何百、何千という転生のなかで困難を体験してきたのです。彼らが達成したことは今日の人間に提供されています。今日の人間は彼らが到達したレベルに到達するためにそれほど多くの転生を繰り返す必要はありません。ですから、私たちが今ここで行っていることは加速化であり、それ以外の何ものでもない、と私は言っているのです。

そうです、誰でも最終的には生それ自体という源へ戻りますが、私たちは全ての人のためにそれを加速化しようとしているのです。それだけです。それについて考えてください。**しかしそれは、もし誰かの現在のパーソナリティーが自己実現に到達したとき、その人は頂上に達する全ての道を知っているということではありません。実際、気づきの数と同じほど多くの道があります。というのも例えあなたに道が示されたとしても、結局あなたは同時にあなた自身の道に従うことになるからです。**

質問：私たちがそれに反するべきでない不動の法則について話しました。それらの法則はアークエンジェルが具現している、あるいはこの世界にもたらしたものではありません。それなら、どれがそれぞれの四つのアークエンジェルの中にあるのですか？

Ｋ：もし私たちがミカエル達に同調するなら、彼らは火の要素を示しています。私たちはこのエレメントのマスターとなることができます。同じ事が水のエレメントであるガブリエル、エーテルのエレメントであるラファエルについても言えます。**四つ目のエレメントは地です。それをマスターするということは、現在のパーソナリティーが物質を顕現させたり、それを非顕現化することができるということです。**

**現在のパーソナリティーが四面ピラミッドのなかで意識的意識のセルフ・エピグノシスを現している時、そのパーソナリティーはエゴの様々な側面を殺し始めます。**

同時に、その人のアークエンジェル的ヒポスタシス（＊状態）を表現するプロセスがスタートするでしょう。各アークエンジェルのオーダーには創造界のなかで行うべき特定の仕事があります。それだけです。人間は創造界における全てを抱くことができます。

質問：私がより良く理解できるように、火をマスターすること、あるいは水をマスターすることなどについて例を挙げて説明してくれますか？

Ｋ：その時には、

**あなたは普通の人が火のエレメントのなかに入った時のような結果を被ることなしに火のなかに入ることができます。水のエレメントをマスターするなら、水の上を歩くことができます。そういうことです。しかし勿論、それらをマスターすることだけを分けて特に行うのではありません。それは探求する、勉強する目的のためであるにすぎません。エレメントをマスターすること、それは同時に行われることです。**

質問：火の結果を耐えることができ、火から影響を受けなくなること、つまり進化・成長の結果として物質の変容が生じ、その結果影響を受けなくなるということですが、それは肉体の実際の細胞、分子が変容するということですか？

Ｋ：そういうことではありません。どういうことかというと、気づきが上昇し、上昇を続けるにつれて、生の特質がそれだけ多く現れるようになります。生は火であり、光です。肉体がこの生のスパークによって完全に活性化すると、焼かれることがなくなり、害を受けなくなります。なぜならその中にあるサイコノエティアカル体が輝いており、生それ自体をたくさん現しているからです。それが理由です。

質問：はい、意識が上昇すると、それが光のバイブレーションとなるということはわかります。しかし、私の質問は肉体との関係です…。

Ｋ：肉体はそのエレメントからいかなる結果を被ることもありません。なぜでしょうか？なぜなら、肉体のダブル・エーテリックがエネルギー的にあまりにも高くなり、火のエレメントによって害されなくなるからです。ご存じのように、火は触媒的現象です。勿論、マスターということはそのエレメントに対しても同時に行われます。なぜなら私たちは調和的に成長する必要があり、常にバランスのあるパーソナリティーを現す必要があるからです。**現在のパーソナリティーの三つの体に同時に働きかけていく必要があります。**

質問：それではもしその能力に到達した人がいるとすると、その人は例えば火のなかにいる人々を救出するためにその現象を示すことができるのですか？

Ｋ：それは一つの現象であり、背後にそのようなことを行う理由がなければしないでしょう。それは場合によります。しかし、もし助けるとするなら、そのようなことはしないでしょう。もし法則がそれを許すなら、その人は自分のサイコノエティカル体を使って助けることができます。

質問：わかりました。水の上を歩いたり、火のなかを歩いたりする能力を達成しても、それ自体では何もしないということですね。

Ｋ：そうです。誰もが水の上を歩いたり、誰もが火のなかに入ることができる時が来るでしょう。その時には、それを人々の目を引くための一つの現象と見なすことなく、誰もがそれを行うでしょう。その時には、他の人々の前で真面目な探究者、真面目なパーソナリティー、人がそれを行うことでしょう。そのような時が来るまでは行いません。

Page 7

質問：かなり基本的な質問をしてよいでしょうか？理論に耳を傾けたりする以外に、成長するためにどんなことをするのでしょうか？より良い自分となるために私たちが自分自身で何をすることができるでしょうか？

Ｋ：私たちが提供するたくさんのワークがあります。私たちは探究者たちがその種のワークに従うよう望んでいます。自分自身で行うのです。もし行わない場合には、彼らは“静止”状態に留まるでしょう。なぜなら、前に述べたようにゆっくりした動きというものはないからです。そうです、私たちはこの動きを加速化しています。懸命なワーク、自己省察、自己分析を通じて知識として与えられたものを実践します。私たちが与える知識は全て既にテストされているものばかりです。もしテストしないで提供するとしたら、私たちは真剣な探究者とは言えません。経験に基づいた知識が与えられ、勿論その知識だけでは十分ではありません。というのも単なる知識だけでは求めるものとは反対のものを創造するからです。

**知識それ自体はエゴを強め、パーソナリティーは自分は何でも知っていると考えるようになります。それは私たちが求めることではありません。**

何であれ私たちに与えられるもの、私たちはそれをテストします。それについて問うことをします。そして試してみます。そのなかに論拠があるのを見いだしたら、それを現そうと試みます。ゆっくりと、ゆっくりと、それはゆっくりしたプロセスです。理解する必要があります、それは緩慢なプロセスです。もしテクニカルな手段やマジックを使うプロセスによって加速しようとするなら、あなた方は自分を大きな危険に導いています。なぜなら、前に述べたように無知という私たちの部屋のなかで私たちは守られています。この無知のシールドに穴を開け、ドアー、窓を開けようとするなら、そのパーソナリティーは大変な結果を経るようになります。そのパーソナリティーは精神分裂病といわれるような状態にまで陥るかもしれません。そしてそのような状態は不幸にも一回の転生だけに留まることはありません。そのようなパーソナリティーを整えるのは非常に困難です。多くの人々は考えます、「私はとても強い。私は何も恐れない。私はこれを試してみようではないか。これを実践しよう。悪いことはない」と。そこには沢山の幻想があります。それは広く実践されているから何も問題はないだろう、と考えます。しかし、最後にはそのようなことが生じ、その時には遅すぎます。いいですか、遅すぎるのです。パワーと能力を現すために多くの人々がやっているように

**チャクラと言われるセンター、ドアーを開こうとするなら、彼らは後になって必ずそれを後悔することでしょう。**

質問：それではあなたはチャクラを開こうとすべきではない、と言うのですね。

Ｋ：そうです。**決してすべきではありません。エネルギーを活性化するという名目でチャクラに触れないようにしてください。唯一の目的はより良いセルフを現すことであり、それは気づきの上昇によってであり、思考・行動の仕方としての現在のパーソナリティーに対するワークを通じてであるべきです。それだけです。**

**現在多くのシステムはクンダリーニの創造的エーテルを上昇させることによってチャクラを活性化させようとしています；しかし、一つだけ言いたいことがあります。これについては長くは話しません。人間が上昇と考えること、それは実際には下降なのです。私は「あなたは五つの超感覚を使うことができますか？」と尋ねましょう。何人の人がそれらを使うことができますか？ですから、上昇と見なしていることは下降なのです。そしてこの生命の木が完全に上下反対になっているのです。もし私たちがクンダリーニを上昇させようとするなら、実際にはそれは上に行くのではなくて下に向かいます。というのも、木が下向きになっていて、地面のなかに入っているからです。多くのイリュージョンがあり、多くのパワーはそのメソッドを実践しているその人が行っているのではなくて、実際には地中のエレメンタルが行っており、そのパーソナリティーを騙しているのです；しかし、そのエレメンタルは何かをサービスとして行う時にはその人にお返しを求めます。彼らは常にエネルギーを与えられる必要があり、この種のワークをやっている人は小さくなってしまうのを私たちは見ています。最終的には彼ら（エレメンタル）はさらに多くを要求し、そのパーソナリティーは闇に仕える召使いになってしまうのです。**

ですから、まず私たちは五芒星をその適正な位置にします。その時初めて現在のパーソナリティーについてワークを始めます。それだけです。生から与えられるものは全ての人のなかにあります。創造界の全ての人間のなかにあります。これが全ての人に対する私のアドバイスです。皆さんがそれに耳を傾けるか否か、それはその人次第です。そうです、多くの人々はこのアドバイスに反対するでしょう。しかし、それはそのような人々の益にはなりません。私がそれを保証します。いつかそのような人々が、それらについてエレブナは正しかった、と言うときが来るでしょう。私たちは時のなかで体験しなかったことを言うことはありません。それは保証します。私たちはそれら全てを経験し、経てきているので；他の人々にもそれを経て欲しいのです。私たちが知らない過去のシステムはありません。それらのシステムはその目的に役立ってきましたが、私たちはもはやそれを必要としません。私たちは前に進んでいます。

かつては、神秘的現象によって無知のなかにいる人間を支配することができました。そのためにこの地球上の様々な場所で現象をみることができるのです。ファラオは神秘的現象を行い、多くの能力とパワーを持ち、神官でさえ神秘現象を行っていました。しかし、もはや私たちは神秘現象を必要としません。許される唯一の神秘的現象は痛みを軽減する神秘的現象であり、それだけです。そして痛みを軽減するのは愛、アガピの結果であり、それは内側から来るものであり、それは生のスパークから来るもので、主から来ます。主がその働きを提供し、誰であろうと、いかなるパーソナリティーであろうと「私がそれを行っている」と主張することはできません。「私」というものはもはや存在しないのです。

そのようなことを行っているパーソナリティーは何かを提供しているときには他の人々に感謝するべきであり、感謝を期待すべきではありません。あなたはその人を抱きしめる機会を与えてくれた他の人に感謝すべきであり、あなたを特別な人だと考えて他の人々があなたの前にひざまずくのを決して受け入れるべきではありません。しかし、残念なことに世界中の様々な場所でそのような光景を見ることができます。私たち全ての人間の前で主は過去においても現在においてもひざまずいています。主は私たちを助けるために私たちの前で跪づき、私たちはあらゆる瞬間に主を十字架にかけています。創造界における私たち全員が。それは愛であり、私たちのエゴ(ego)、小文字のエゴに基づいた愛ではありません。なぜなら大文字のエゴ（Ego）とは愛それ自体だからです。

あなたが五つの超感覚を使って自分自身を現わす状態に到達したとき、もはや距離は問題ではありません。何千マイル離れたところからでも聴くことができ、見ることができます。さらにそれよりもいくらか上昇すると、あなたは同時に様々な場所にいることができ、何であれ多くの場所から聴き、見て、感じ、味わうことができます。第三の目などというものはありません。残念なことに今でも第三の目というものがあると考えている人々がいます。そんなものはありません。もしあなたが五つの超感覚を現すようになれば、あなたの諸体の全ての原子、分子、細胞がそれら五つの超感覚を使うことができます。あなたは自分自身から一つの原子を投射し、その原子が何でも見、聴き、感じることができるのです。あなたは片手を何千マイルも遠くに投射し、その手あるいは指が聴き、見ることができるのです。自分自身を現わすために五つの超感覚を使用しているパーソナリティーには限界というものがありません。ですから、第三の目という考えは過去の概念であり、過去の人々が理解していたものです。

ですから忍耐、忍耐であり、自分自身に確信を抱き、もしあなたが自分自身に誠実であるなら、あなたはそれを超えていきます。しかし、決して自分自身を騙すこと、つまりあなたの幻想と共に生きることはしないでください。色目を使う人を持たないようにしなさい。私たちは子供からさえ学ぶことができます。子供によっては、私たちよりもずっと年上であることもあります。私たちよりもずっと多くの転生を経てきているかもしれません。ですから忍耐が必要です。そうすれば神はあなたと共にあるでしょう。主はあなたの中にいます。

EREVNA/SPA25.DOC/K7/01